

# 「学問に王道なし」

校長 駒田 勝

人生には、将来を大きく左右する「岐路（分かれ道）」というものが、何度か訪れます。その一つが高校3年生の「進路決定」の時とも言えます。目標に向け努力した日々が最も大切で、それは人生を変えるものです。

先日、岩波新書『まちがえる脳』（桜井芳雄 著）を読んでいて、「暗記パン」を思い出しました。ドラえもんの四次元ポケットの中にある「暗記パン」は、覚えたいページに押し付け、食べることで写し取った内容をそのまま記憶できるという代物です。丸暗記の苦手な私には常備しておきたい夢のような逸品です。

ところで、この新書によると、世の中には「暗記パン」に頼らずとも、まるでコピーのように正確に記憶をいつまでも保持できる人が存在するようです。1920年代のソビエト連邦（現 ロシア）において、この特殊な能力をもつ人が偶然発見され、その後、30年間にわたり研究の対象とされたそうです。この研究で分かったことは、その記憶容量が事実上無限で、時間が経過しても減弱することなく、覚える際に暗記する努力はまったく不要と、なんとも羨ましい能力なのです。見たり聞いたりしたことが、そのまま鮮明な視覚的な「像」として残り、まるで複写したかのように記憶されているというから驚きです。最近では、人の名前や記憶違い、前日の夕食のメニューすら少し考えないと出てこない私からすると、妬ましい限りです。

一方で、研究者が最も驚いたことは、彼は物事をうまく忘れることができないという事実でした。記憶したことを忘れるのに多大な努力を必要とし、ほとんどの場合、うまく忘れることが出来ず苦痛を感じていたといいます。また、記憶があまりに正確で変容しないため、記憶同士を再構成したり統合したりすることができず、創造力や抽象的思考力が乏しいことも明らかになりました。

逆に言えば、人間の記憶は、曖昧で物忘れや思い違いを起こすような柔軟な神経回路があるからこそ、創造的な仕事が可能になるということです。苦勞なく物事を忘れることのできる力も、ありがたい大切な能力の一つと言えそうですね。

とはいえ、受験生の皆さんにとっては、正確な知識とその理解は大学入試の不可欠な要因の一つです。人間の記憶は、学習直後から減弱し始める不確定なものであることを十分に理解しましょう。そして、エビングハウスの忘却曲線が示すとおり、反復学習こそが記憶の定着を図る唯一の方法であることを意識し、早め早めに対策を練り、限られた時間を大切に使用したいものです。昔から「学問に王道なし」とはよく言ったものです。

最後になりましたが、この「進路の手引き」は、本校の先生方による手作りの資料で、皆さんの先を歩む先輩たちの貴重な情報がまとめられたものです。大いに活用してもらいたいものです。特に、先輩からのメッセージ「合格体験記」は生きた情報であり、他では得がたい資料です。この先、進むべき道が見通せず、心細く不安になったときには、この冊子を手にとってみましょう。きっと、心強い味方になってくれるはずです。